

ある心の風景

梶井基次郎

喬たかしは彼の部屋の窓から寝静まつた通りに凝視みつていた。起きている窓はなく、深夜の静けさは暈かきとなつて街燈のぐるりに集まつていた。固い音が時どきするのは突き当つていく黄金虫ぶんぶんの音でもあるらしかった。

そこは入り込んだ町で、昼間でも人通りは少なく、魚の腹綿はらわたや鼠の死骸は幾日も位置を動かなかった。両側の家々はなにか荒廃していた。自然力の風化して行くあとが見えた。紅殻べにがらが古びてい、荒壁の塀へいは崩れ、人びとはそのなかで古手拭のように無気力な生活をし

ているように思われた。喬の部屋はそんな通りの、
卓子テーブルで言うなら主人役の位置に窓を開いていた。

時どき柱時計の振子の音が戸の隙間から洩れてきこえて来た。遠くの樹に風が黒く渡る。と、やがて眼近い夾竹桃きょうちくとうは深い夜のなかで揺れはじめるのであった。
喬たかしはただ凝視なげみっている。——暗やみのなかに灰白ほのく浮かんだ家の額ひたいは、そうした彼の視野のなかで、消えてゆき現われて来、喬は心の裡に定かならぬ想念のまた過ぎてゆくのを感じた。蟋蟀こむぎが鳴いていた。そのあたりから——と思われた——微かすかな植物の朽ちてゆく匂いが漂って来た。

「君の部屋は仏蘭西フランスの蝸牛エスカルゴの匂いがするね」

喬のところへやって来たある友人はそんなことを言った。またある一人は

「君はどこに住んでも直ぐその部屋を陰鬱にしてしま
うんだな」と言った。

いつも紅茶の滓かすが溜かっているピクニック用の湯沸器。
帙ちゆうと離ればなれに転ころがっている本の類。紙切れ。そし
てそんなものを押しわけて敷かれています蒲団。喬はそ
んななかで青鷺あおさぎのように昼は寝ていた。眼が覚めては
遠くに学校の鐘を聞いた。そして夜、人びとが寝静
まった頃この窓へ来てそとを眺めるのだった。

深い霧のなかを影法師のように過ぎてゆく想念がだんだん分明になつて来る。

彼の視野のなかで消散したり凝ぎょう聚しゅうしたりしていた風景は、ある瞬間それが実に親しい風景だったかのよう、またある瞬間は全く未知の風景のように見えはじめる。そしてある瞬間が過ぎた。——喬にはもう、どこまでが彼の想念であり、どこからが深夜の町であるのか、わからなかつた。暗のなかの夾竹桃はそのまま彼の憂鬱であつた。物陰の電燈に写し出されている土塀、暗と一つになっているその陰影。観念もまたそこで立体的な形をとつていた。

喬たかしは彼の心の風景をそこに指呼することができる、
と思つた。

二

どうして喬がそんなに夜更けて窓に起きているか、それは彼がそんな時刻まで寝られないからでもあつた。寝るには余り暗い考えが彼を苦しめるからでもあつた。彼は悪い病気を女から得て来ていた。

ずっと以前彼はこんな夢を見たことがあつた。

——足が地じ脹はれをしている。その上に、嚙かんだ齒が、

たのよふたならうなものが二列びついている。脹れはだんだん
ひどくなつて行つた。それにつれてその痕あとはだんだん
深く、まわりが大きくなつて来た。

あるものはネエヴルの尻のそのようである。盛りあがつ
た気味悪い肉が内部から覗のぞいていた。またある痕は、
細長く深く切れ込み、古い本が紙魚しみに食ぬい貫ぬかれたあ
とのようになつている。

変な感じで、足を見ているうちにも青く脹れてゆく。
痛くもなんともなかつた。腫物はれものは紅い、サボテンの花
のようである。

母がいる。

「あああ。こんなになった」

彼は母に当てつけの口調だった。

「知らないじゃないか」

「だって、あなたが爪でかたをつけたのじゃありませんか」

母が爪で压したのだ、と彼は信じている。しかしそう言ったとき喬たかしに、ひよつとしてあれじゃないだろうか、という考えが閃ひらめいた。

でも真逆まさか、母は知ってはいないだろう、と気強く思い返して、夢のなかの喬は

「ね！ お母さん！」と母を責めた。

母は弱らされていた。が、しばらくしてとうとう

「そいじや、癒なほしてあげよう」と言った。

二列の腫物はれものはいつの間にか胸から腹へかけて移つていた。どうするのかと彼が見ていると、母は胸の皮を引張つて来て（それはいつの間にか、萎しぼんだ乳房のようになると）一方の腫物を一方の腫物のなかへ、ちようど釘ボタンを嵌はめるようにして嵌め込んでいった。夢のなかの喬はそれを不足そうな顔で、黙つて見ている。

一つ対いずつ一つ対いずつ一列の腫物は他の一列へそういうふうにしてみな嵌まってしまった。

「これは××博士の法だよ」と母が言った。釦の多いフロックコートを着たようである。しかし、少し動いてもすぐ脱れはずそうで不安であつた。――

何よりも母に、自分の方のことは包み隠して、気強く突きかかつて行つた。そのことが、夢のなかのことながら、彼には応こたえた。

女を買うということが、こんなにも暗く彼の生活へ、夢に出るまで、浸しみ込んで来たのかと喬は思った。現実の生活にあつても、彼が女の兎の相手になつている。そしてその兎が意地の悪いことをしたりする。そんなときふと邪慳じゃけんな娼婦は心に浮かび、喬たかしは堪たまらない自

己けんお嫌厭に墮おちるのだった。生活に打ち込まれた一本の楔くさびがどんなところにまで歪ひずみを及ぼして行っているか、彼はそれに行き当るたびに、内面的に汚れている自分を識しってゆくのがあった。

そしてまた一本の楔、悪い病気の疑いが彼に打ち込まれた。以前見た夢の一部が本当になったのである。

彼は往来で医者いしやの看板かんばんに気をつける自分を見出すようになった。新聞の広告をなにげなく読む自分を見出すようになった。それはこれまでの彼が一度も意識してした事のないことであつた。美しいものを見る、そして愉快になる。ふと心のなかに喜ばないものがある

のを感じて、それを追ってゆき、彼の突きあたるものは、やはり病気のことであつた。そんなとき喬は暗いものに到るところ待ち伏せされているような自分を感じないではいられなかつた。

時どき彼は、病める部分を取出して眺めた。それはなにか一匹の悲しんでいる生き物の表情で、彼に訴えるのだった。

三

喬はたびたびその不幸な夜のことを思い出した。――

彼は酔つ払った嫖客ひょうきゃくや、嫖客を呼びとめる女の声の聞こえて来る、往来に面した部屋に一人坐っていた。勢いづいた三味線や太鼓の音が近所から、彼の一人の心に響いて来た。

「この空気！」と喬たかしは思い、耳を欮そはだてるのであつた。ゾロゾロと履物はきものの音。間を縫つて利休が鳴っている。——物音はみな、あるもののために鳴っているように思えた。アイスクリーム屋の声も、歌をうたう声も、なにからなまでに。

小婢こおんなの利休の音も、すぐ表ての四条通ではこんなふ

うには響かなかつた。

喬は四条通を歩いていた何分か前の自分、——そこでは自由に物を考えていた自分、——と同じ自分をこの部屋のなかで感じていた。

「とうとうやって来た」と思った。

小婢が上つて来て、部屋には便利炭の蠟ろうが匂つた。喬は満足に物が言えず、小婢の降りて行つたあとで、そんなすぐに手の裏返したようになれるかい、と思うのだつた。

女はなかなか来なかつた。喬は屈託した気持で、思いついたまま、勝手を知つたこの家の火の見へ上つて

行こうと思つた。

朽ちかけた梯子はしこをあがろうとして、眼の前の小部屋の障子が開いていた。なかには蒲団が敷いてあり、人の眼がこちらを睨にらんでいた。知らぬふりであがって行きながら喬は、こんな場所での氣強さ、と思つた。

火の見へあがると、この界限かいわいを覆っているのは暗い藁いらかであつた。そんな間から所どころ、電燈をつけた座敷すだれが簾すだれ越しに見えていた。レストランの高い建物が、思わぬところから頭を出していた。四条通はあすこかと思つた。八坂神社の赤い門。電燈の反射をうけて灰ほのかに姿を見せている森。そんなものが藁いらか越しに

見えた。夜の靄が遠くはぼかしていた。円山、それから東山。ひがしやま天の川がそのあたりから流れていた。

たかし喬は自分が解放されるのを感じた。そして、

「いつもここへは登ることに極めよう」と思った。

五位が鳴いて通った。煤黒い猫が屋根を歩いていた。

喬は足もとにすが闖れた秋草の鉢を見た。

女は博多から来たのだと言った。その京都言葉に変な訛りがあった。みだしな身嗜みが奇麗で、喬は女にそう言った。そんなことから、女の口はほぐれて、自分がまだ出てそうそ匆匆だのに、先月はお花を何千本売って、この廓くるわで四番目なのだと言った。またそれは一番から順に検

番に張り出され、何番かまではお金が出る由言った。女の小ぎつぱりしているのはそんな彼女におかあはん、というのが気をつけてやるのであった。

「そんなわけやでうちも一生懸命にやってるの。こないだからもな、風邪ひいとるんやけど、しんどうてな、おかあはんは休めというけど、うちは休まんのや」

「薬は飲んでるのか」

「うちでくれたけど、一服五銭でな、……あんなものなんぼ飲んでもきかせん」

喬はそんな話を聞きながら、頭ではS—という男の話にきいたある女の事を憶いおも浮かべていた。

それは醜い女で、その女を呼んでくれと名を言うときは、いくら酔つていても羞はずかしい思いがすると、S—は言つていた。そして着ている寝間着の汚きたないこと、それは話にならないよと言つた。

S—は最初、ふとした偶然からその女に当り、その時、よもやと思つていたような異様な経験をしたのであつた。その後S—はひどく酔つたときなどは、気持にはどんな我慢をさせてもという氣になつてついその女を呼ぶ、心が荒くなつてその女でないと満足できないようなものが、酒を飲むと起こるのだと言つた。

喬たかしはその話を聞いたとき、女自身に病的な嗜好しこうが

あるのなればとにかくだがと思い、畢竟廓ひじきやくでの生存競争が、醜いその女にそのような特殊なことをさせるのだと、考えは暗いそこへ落ちた。

その女は瘰おしのように口をきかぬとS―は言った。もつとも話をする気にはならないよと、また言った。いったい、やはり瘰の、何人位の客をその女は持つているのだろうか、その時喬は思った。

喬はその醜い女とこの女とを思い比べながら、耳は女のお喋しゃべりに任せていた。

「あんたは溫柔おとなしいな」と女は言った。

女の肌は熱かった。新しいところへ触れて行くたび

に「これは熱い」と思われた。――

「またこれから行かんならん」と言つて女は帰る仕度をはじめた。

「あんたも帰るのやろ」

「うむ」

喬は寝ながら、女がこちらを向いて、着物を着ておるのを見ていた。見ながら彼は「さ、どうだ。これだ」と自分で確めていた。それはこんな気持であつた。――平常自分が女、女、と想っている、そしてこのような場所へ来て女を買うが、女が部屋へ入つて来る、それまではまだいい、女が着物を脱ぐ、それまでもまだ

いい、それからそれ以上は、何が平常から想っていた女だろう。「さ、これが女の腕だ」と自分自身で確める。しかしそれはまさしく女の腕であつて、それだけだ。そして女が帰り仕度をはじめた今頃、それはまた女の姿をあらわして来るのだ。

「電車はまだあるか知らん」

「さあ、どうやら」

喬たかしは心の中でもう電車がなくなつていてくれれば
いいと思つた。階下のおかみは

「帰るのがお厭いやどしたら、朝まで寝とおいやしても、
うちはかましまへん」と言うかも知れない。それより

「誰ぞをお呼びやおへんのどしたら、帰つとくれやす」と言われる方が、と喬は思うのだった。

「あんた一緒に帰らへんのか」

女は身じまいはしたが、まだ愚図ついていた。「まあ」と思い、彼は汗づいた浴衣ゆかただけは脱ぎにかかった。女は帰つて、すぐ彼は「ビール」と小婢こおんなに言いつけた。

ジユ、ジユクと雀の啼声なきごえが樋とけにしていた。喬は朝靄あさちやのなかに明けて行く水みずしい外面を、半分覚めた頭に描いていた。頭を挙げると朝の空気のなかに光の薄

れた電燈が、睡っている女の顔を照していた。

花売りの声が戸口に聞こえたときも彼は眼を覚ました。新鮮な声、と思った。榊さかきの葉やいろいろの花にこぼれている朝陽の色が、見えるように思われた。

やがて、家々の戸が勢いよく開いて、学校へ行く子供の声が路に聞こえはじめた。女はまだ深く睡っていた。

「帰って、風呂へ行つて」と女は欠伸あくびまじりに言い、束髪の上へ載せる丸く編んだ毛を掌に載せ、「帰らしてもらいまっさ」と言つて出て行つた。喬たかしはそのまままた寝入つた。

四

喬は丸太町の橋の袂たもとから加茂磧かわらへ下りて行つた。磧に面した家々が、そこに午後の日蔭を作つていた。

護岸工事に使う小石が積んであつた。それは秋日の下で一種の強い匂いをたてていた。荒神橋の方に遠心乾燥器が草原に転つていた。そのあたりで測量の巻尺が光つていた。

川水は荒神橋の下手で簾すだれのようになつて落ちている。夏草の茂つた中洲なかすの彼方かなたで、浅瀬は輝きながらサ

ラサラ鳴っていた。鵺せきれいが飛んでいた。

背を刺すような日表ひなたは、蔭となるとさすが秋の冷たさがくぐまが踞くぐまっていた。喬はそこに腰を下した。

「人が通る、車が通る」と思った。また

「街では自分は苦しい」と思った。

川向うの道を徒歩や車が通っていた。川添の公設市場。タールの樽たるが積んである小屋。空地では家を建てるのか人びとが働いていた。

川上からは時どき風が吹いて来た。カサコソと彼の坐っている前を、皺しわになった新聞紙が押されて行った。小石に阻はばまれ、一しきり風に堪えていたが、ガツクリ

一つ転ると、また運ばれて行つた。

二人の子供に一匹の犬が川上の方へ歩いて行く。犬は戻つて、ちよつとその新聞紙を嗅いで見、また子供のあとへついて行つた。

川のこちら岸には高い櫟けやきの樹が葉を茂らせている。喬たかしは風に戦そよいでいるその高い梢こずえに心は惹ひかれた。ややしばらく凝視みっているうちに、彼の心の裡のなにかがその梢とまに棲り、高い気流のなかで小さい葉と共に揺れ青い枝と共に撓たわんでいるのが感じられた。

「ああこの気持」と喬は思った。「視みること、それはもうなにかなのだ。自分の魂の一部分あるいは全部がそ

れに乗り移ることなのだ」

喬はそんなことを思った。毎夜のように彼の坐る窓辺、その誘惑——病鬱や生活の苦渋が鎮められ、ある距へだたりをおいて眺められるものとなる心の不思議が、ここの高い櫓の梢にも感じられるのだった。

「街では自分は苦しい」

北には加茂の森が赤い鳥居を点じていた。その上に遠い山々は累かさなって見える。比叡山——それを背景にして、紡績工場の煙突が煙を立登らせていた。赤煉瓦れんがの建物。ポスト。荒神橋には自転車を通り、パラソルや馬力ばりきが動いていた。日蔭は磧に伸び、物売りのラツ

パが鳴っていた。

五

喬は夜更けまで街をほつつき歩くことがあった。^{たかし}

人通りの絶えた四条通は稀に酔っ払いが通るくらいのもので、夜霧はアスファルトの上までおりて来ている。両側の店はゴミ箱を舗道に出して戸を鎖してしまっている。所どころに嘔吐がはいてあったり、ゴミ箱が倒されていたりした。喬は自分も酒に酔ったときの経験は頭に上り、今は静かに歩くのだった。

新京極に折れると、たてた戸の間から金盥かなだらひを持つて風呂へ出かけてゆく女の下駄が鳴り、ローラーズケートを持ち出す小店主、うどんの出前を運ぶ男、往來の真中で棒押しをしている若者などが、異様な盛り場の夜更けを見せている。昼間は雑ざつと鬧のなかに埋れていたこの人びとはこの時刻になって存在を現わして来るのだと思えた。

新京極を抜けると町はほんとうの夜更けになっている。昼間は気のつかない自分の下駄の音が変に耳につく。そしてあたりの静寂は、なにか自分が変なたくらみを持って町を歩いているような感じを起こさせる。

喬は腰に朝鮮の小さい鈴を提^さげて、そんな夜更け歩いた。それは岡崎公園にあつた博覧会の朝鮮館で友人が買つて来たものだった。銀の地に青や赤の七宝が書いてあり、美しい枯れた音がした。人びとのなかでは聞こえなくなり、夜更けの道で鳴り出すそれは、彼の心の象徴のように思えた。

ここでも町は、窓辺から見る風景のように、歩いてゐる彼に展^{ひら}けてゆくのであつた。

生まれてからまだ一度も踏まなかつた道。そして同時に、実に親しい思いを起こさせる道。——それはもう彼が限られた回数通り過ぎたことのあるいつもの道

ではなかった。いつの頃から歩いているのか、喬は
自分がとことわの過ぎてゆく者であるのを今は感じた。

そんな時朝鮮の鈴は、喬の心を顫ふるわせて鳴った。あ
る時は、喬の現身うつせみは道の上に失われ鈴の音だけが町を
過るかと思われた。またある時それは腰のあたりに湧わ
き出して、彼の身体の内部へ流れ入る澄み透った溪流
のように思えた。それは身体を流れめぐって、病気に
汚れた彼の血を、洗い清めてくれるのだ。

「俺はだんだん癒なおってゆくぞ」

コロコロ、コロコロ、彼の小さな希望は深夜の空気
を清らかに顫ふるわせた。

六

窓からの風景はいつの夜も滹かわらなかつた。喬にはどの夜もみな一つに思える。

しかしある夜、喬は暗やみのなかの木に、一点の蒼白あおしろい光を見出した。いずれなにかの虫には違いないと思えた。次の夜も、次の夜も、喬はその光を見た。

そして彼が窓辺を去つて、寢床の上に横になるとき、彼は部屋のなかの暗にも一点の燐光りんこうを感じた。

「私の病んでいる生き物。私は暗闇のなかにやがて消

えてしまう。しかしお前は睡らないでひとりおきてい
るように思える。その虫のように……青い燐光を燃
しながら……」

底本…「檸檬・ある心の風景」 旺文社文庫、旺文社

1972（昭和47）年12月10日初版発行

1974（昭和49）年第4刷発行

入力：j.utiya

校正…陸野義弘

1998年10月13日公開

2005年10月2日修正

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。